

帝人、胡蝶蘭栽培で障害者自立支援

SDGs対応 雇用増・収益化の両立が鍵

農業と福祉を組み合わせた「農福連携」で、知的障害者らの経済的自立を支援する企業が出てきた。支援事業で障害者雇用率が上がるうえ、国連の持続可能な開発目標「SDGs」に沿った取り組みとして投資家などの評価を高めることにもつながるからだ。今後の広がりが期待される一方、障害者の自立と事業の黒字化を両立させるハードルは高そうだ。

1年で「最高技術者」

千葉県我孫子市郊外の温室に純白の花がずらりと並ぶ。帝人が障害者雇用を促進するために設立した特例子会社、帝人ソレイユが運営する農園「ポレポレファーム」で、障害者らが丹精込めて育てた胡蝶蘭だ。

見栄えをよくするため花の方向を整える「仕立て」という作業を任されているのは、昨年4月入社した廉谷貞治氏。1鉢に3本の花を寄せ植えする3本立てを仕上げるのに1年前は2時間超かっていたが、今では1時間を切る。丁寧に仕事も早いことが認められ「最高技術者」として5本立てに挑戦する。

資材製作担当の黒木賢智氏は重度の知的障害がありながら器用で力加減が分かり、集中力と持久力がある。仕事場では反復作業を黙々とこなす。



胡蝶蘭の花の向きを整える帝人ソレイユの廉谷貞治氏＝7月、千葉県我孫子市

統括マネージャーを務める鈴木崇之取締役は「性格などから得意分野を見極めて、適材適所で仕事を任せる。メンバーの技術は確実にレベルアップしている」と話す。

ポレポレで胡蝶蘭栽培を始めたのは令和2年4月。栽培が軌道に乗るにつれ帝人内で認知度が向上。秘書室は贈答用に購入していた胡蝶蘭を全てポレポレで栽培したものに切り替えたほか、各事業・部署からの注文も増えた。6年度には年間4000～5000鉢（3本立て換算）を栽培する計画で、企業の贈答用市場

をターゲットに売り上げ1億5000万円を目指す。7年度には取引先企業を500社に増やし、営業黒字化も視野に入れる。そのためにポレポレ産のブランド化を図るとともに、帝人の鈴木純社長らによるトップセールスで顧客開拓を進めるという。

NPO法人から技術

ポレポレは平成31年4月に障害者を採用して野菜栽培を始めたが経営的には苦しかった。そこで目をつけたのが胡蝶蘭だ。NPO法人AlonAlon（アロンアロン、同県いすみ市）が障害者



アロンアロンが運営する「オーキッドガーデン」で働く障害者とスタッフ。前列左から2番目が那部智史理事長＝千葉県富津市

の経済的自立という成果を出していることを知り教を請うた。

アロンアロンは、企業への就職が難しいとされる中から重度の障害者が働いて収入を得る就労継続支援B型事業所を運営する。農園「オーキッドガーデン」（同県富津市）で20年9月から胡蝶蘭栽培を開始し、品質が認められて取引先企業は2500社を超えた。

那部智史理事長によると「メンバー全員が働いているうちに胡蝶蘭栽培の職人に成長する。技術が認められて企業に就職したメンバーもいる」。活躍の場を与えられた障害者の収入増（最高で月10万円）と就労機会の創出につながっている。帝人ソレイユに続いて自社農園をつくる企業も出始めており、アロンアロンは胡蝶蘭栽培のプロデュースに注力し全国展開を図る

考えだ。

容易でない農福連携

農業には多種多様な作業があり、障害のレベルにあった仕事を選べるため、農福連携で障害者雇用率を上げた企業は増えている。しかし、「その質には課題があり、障害者を戦力化できていない企業は多い」と厚生労働省障害者雇用対策課の小野寺徳子課長は指摘する。

企業が事業に乗り出す以上、利益を出すことは大前提だ。だが、国が義務づける障害者の法定雇用率（2.3％）にこだわる余り、活用法を十分に考えないまま、赤字覚悟で障害者の採用に動いているケースもある。

障害者の特性を見抜いて、能力や強みを生かす仕事を任せながら、いかに収益を上げていくか。自立支援事業のかじ取りは容易ではない。（松岡健夫）